

哲学の〈女性性〉再考

—クロスジェンダーな哲学対話に向けて

提題者：齊藤直子(京都大学)

討論者：荒井祐介(日本大学)、

ギブソン松井佳子(神田外語大学)、齊藤直子(京都大学)

朱燁(京都大学)

本ワークショップの問題提起：哲学の〈女性性〉再考

男女共生社会に向けて、女性の地位向上のための様々な試みがなされている。国際的にみても、哲学における女性研究者の数は少ない(J. Wolff, 2013)。日本哲学会においても、女性哲学者の数を増やし、女性研究者の声を取り入れる試みがなされている。しかしながら、「女性の声」とは何か(what)、そしていかにして(how)「女性の声」をとらえ、発話し、表すか、という点において不均衡は残り続けている。ジェンダー平等のかけ声にも関わらず、哲学は依然として男性中心的であり、女性は周縁存在である。これは、数字や目に見える部分だけの問題ではなく、哲学の思考様式と言語使用の仕方そのものに関わる問題でもある。男性哲学者も女性哲学者も、女性について語りはしても、その言説の様式、自身の言語遂行様式は、往々にして慣習的なアカデミズムの語彙や語り方のマトリックスに閉じ込められている。とりわけ、女性の権利やジェンダーの平等の語彙を通じた政治的・イデオロギー的な闘争の中で、女性について語る哲学的言説の仕方は、男性による女性の声の「盗窃」(Cavell 1996)であり、本来女性の声をもつ豊かさや個別性を覆い隠し、女性が自身の声を自縛する状況をも生み出す。こうした状況は、女性の声を男性の声に回収する再専有の構造を再生産する。この再専有の循環は男性と女性の会話を遮断するばかりでなく、両者の分断の壁を増強する。この悪循環を断ち切り、ジェンダー分断の壁を崩すには、哲学者自らが女性的な思考様式を遂行できるような哲学のしかた、語り方の転換が必要となる。

哲学において女性的な声とは何を意味し、それにいかにして耳を傾けられるようになるのか—本パネルでは、この問いに応えるべく、哲学の思考様式と言語様式の変容を促す「哲学のサブジェクト転換」(Standish 2012)—を哲学の声を所有するサブジェクト、哲学の内容としてのサブジェクト双方の転換—を主題化しこれを論じる。

ワークショップの構成：哲学のサブジェクト転換、学際的対話へ

周縁にある女性の声に男性も女性も耳を傾け、それによって両者の思考様式と言語そのものが変わり、両者の足場が揺さぶられるということはいかにして可能になるのか。女性が女性を自縛する哲学の思考様式と語彙からの解放はいかにして可能になるのか。「いかに」を巻き込むこれらの問いは、男性と女性が哲学のサブジェクトとしてともに変容を被ることを学ぶような、哲学の教育(education of philosophy)—哲学による教育/哲学を教育すること—を求めることになる。その転換の果てに再生する新たなサブジェクトとして、本パネルでは「クロスジェンダーな哲学の女性性」を、国際的な経験と視座をもつ、哲学-教育-文学-政治学の研究者たちによる学際

的対話を通じて思考実験する。女性の声をめぐる学際的視座の交差を通じて、哲学のアイデンティティ、そのサブジェクトを問い直し、その境界を揺さぶることが目指される。

ワークショップではまず、提題者が、問題提起を行う。クロスジェンダーな女性性は、女性の生物的な身体や特徴、経験を否定することなく、なおかつそれをイデオロギー化されるジェンダーの分断状況の制約から解放するものである。ここでの力点は、女性的な身体象徴の側面を残す、女性にも男性にも人間として共有される原型(archetype)であり、女性と男性が文化的・社会的に区分されイデオロギーの言説の対象となる以前の「幼児」(infantile)(Cavell 2004)の状態である。ここでの女性性は、女性を本質として捉える仕方ではなく、言語と声の性質そのものとしての「女性性」(feminine)として形容される。この問題提起を受けて、4名の討論者が、哲学、政治学、文学、教育の学際的視座から発表と討論を行う。荒井祐介氏は、比較政治学の立場から、日本における政治学、政治の状況全般における女性の声の現状を報告し、政治的議論の中で、女性の声がいかなる言説の中で、どのように語られ、それが女性の声の再専有状況を生み出しているかを論じる。ギブソン松井佳子氏は、比較文学研究の視座から、ポスト構造主義的なジェンダー理論やケア倫理と正義論の文脈の中で、女性の声がいかに語られてきたかを論じる。朱燁氏は、カベルの言語哲学と懐疑主義の観点から女性の声の再専有に関わる声の抑圧と喪失の問題について論じる。齊藤直子は、教育哲学の立場から、スタンリー・カベルの哲学の声と女性の声の思想に基づき、男女共生社会の創造に向けて、男性と女性が相互変容を被りつつともに「女性的になりゆく」哲学の教育の仕方として、「正義の会話」(Cavell 2004)という対話の様式を提言する。

以上、4名による女性の声と哲学のサブジェクト転換に向けた学際的対話を踏まえ、総合討論では哲学の女性性を通じた哲学のサブジェクト転換が、もうひとつの〈もうひとつの女性性〉としての女性の声をいかにしてもたらすことになるか、聴衆を交えて議論を行う。

参考文献

- Butler, Judith. 1997. *Excitable Speech: A Politics of the Performative* (New York and London: Routledge).
- Butler, Judith. 1997. *The psychic Life of Power* (Stanford, CA: Stanford University Press).
- Butler, Judith. 2005. *Giving an Account of Oneself* (New York: Fordham University Press).
- Cavell, Stanley. 1996. *Contesting Tears: The Hollywood Melodrama of the Unknown Woman* (Chicago: The University of Chicago Press).
- Cavell, Stanley. 2004. *Cities of Words: Pedagogical Letters of a Register of the Moral Life* (Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press).
- Gilligan, Carol. 1982. *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development* (Cambridge, MA: Harvard University Press).
- Held, Virginia. 2006. *The Ethics of Care: Personal, Political, and Global* (Oxford: Oxford University Press).
- Wolff, J. 2013. *The Guardian* on November 26, 2013.